沼津市明治史料館通信

二〇一三年四月
通巻113号

■シリーズ　市民が語る戦争体験６
戦艦「大和」と私
西本創造さんの体験談
■24年度新収資料の紹介
■24年度当館収蔵資料の使用

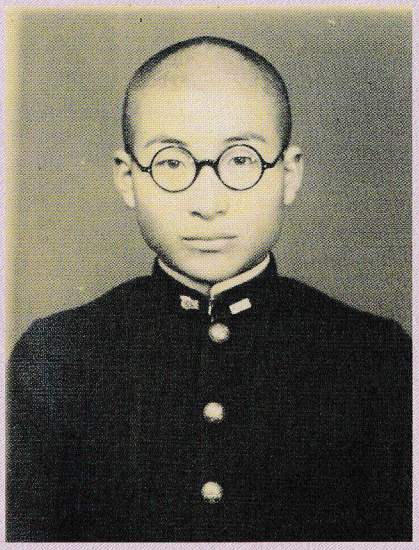
シリーズ　市民が語る戦争体験　6

戦艦「大和」と私

西本創造さんの体験談

西本創造氏略歴

昭和　二年　三月	広島市生まれ
八年　四月	広島市立皆実尋常小学校入学
一三年	神奈川県川崎市に移る
一四年　三月	川崎市立宮前尋常小学校卒業
一四年　四月	川崎市立工業学校入学
一八年一二月二三日	同校繰り上げ卒業
二五日	海軍技研入所（東京都目黒区）
一九年　一月	音響研究部に転勤（沼津市）
二〇年　八月一五日	終戦・解雇



西本　創造さん
昭和18年12月23日
川崎市立工業学校卒業直後（17歳）

実物の戦艦「大和」を見た人は、今となってはもちろん、当時でも非常に少ないと思いますが、私はその中の一人です。

昭和一八年（一九四三）一二月末、私は川崎市立工業学校を繰り上げ卒業し、すぐに東京都目黒区にありました海軍技術研究所に勤めました。勤務予定の音響研究部は、一〇年以上前から駿河湾で超音波兵器の研究実験を行っており、同年八月に沼津市に移転して研究実験を開始していましたが、私は目黒の技術研究所で翌年一月一〇日まで残務整理を行い、一一日に沼津市に転勤しました。

呉海軍工廠に出張
戦艦「大和」との一〇日間

同年一一月二〇日、広島県呉市の海軍工廠に初めて出張しました。二四日の朝、工廠の北門を入ってすぐ目の前の四号ドックで注水を行っていました。四号ドックは、昭和一五年に戦艦「大和」が建造されたところです。普通の艦は船台で建造して進水式を行い、海に浮かべ、その後艤装の為にドックインしますが、戦艦大和は最初からこのドックで建造し、ドックに注水して進水式を行いました。

魚雷実験部に到着すると「軍艦が走って来ます」と教えていただき、岸壁に見に行きました。私はそれ迄軍艦を一度も見たことがありませんでした。同僚が大きな軍艦だと話してくれました。有名な「音戸の瀬戸」の方から軍港に向って、江田島と工廠の間を航走する実に美しい姿の軍艦でした。それまでに写真で見ていた「長門」とは全く異なる艦型でした。

魚雷実験部で仕事の準備を行い、トラックに上乗りして北門に向かいました。造船部の船台は屋根が掛かっていますが、ドックは平らで見通しがよいのです。突然何かに遮られて前方が見えなくなり、「アッ大和だ」との声が聞こえました。上を見上げますと、艦首に燦然と輝く大きな菊の紋章が取り付けられた戦艦でした。先程岸壁から見たあの軍艦でした。「大和」が建造された四号ドックに入っていました。朝の注水はこの為だと納得出来ました。

「大和」は、レイテ海戦（昭和一九年一〇月二四日）で破損して、一一月二四日、修理の為に呉軍港に帰港し、四号ドッグに入渠したのでした。「大和」は実に哀れな姿でした。第一砲塔前の前部甲板付近の左舷に、大きな穴が開いていました。前部甲板に落下した爆弾が艦内で爆発して出来た穴です。第一砲塔付近から後部砲塔部に掛けては、二重構造の四一センチメートルの鋼板で内部は被われています。外部の舷側は二五ミリメートル厚の鋼板を取り付ける修理が始まりました。直径五メートル以上もある大きな穴です。

余りにも無残な哀れな姿になった戦艦「大和」を目の前に見せ付けられましたが、実に大きく美しい姿には見とれるば

用語解説

戦艦「大和」諸元

基準排水量	六四〇〇〇トン
満載排水量	七二八〇九トン
全　長	二六三メートル
水線長	二五六メートル
全　幅	三八・九メートル
公試喫水	一〇・四メートル
主機関	一五三五五三馬力（艦政本部式タービン四機四軸）
最大速力	二七・四六ノット（公試運転）
航続距離	一六ノットで七二〇〇海里（一三三三四キロメートル）
乗員　竣工時	二五〇〇名
最終時	三三三二名
兵装（新造時）	四五口径四六㎝三連装砲塔　三基 六〇口径一五・五㎝三連装砲塔　四基

かりでした。世界一大きな軍艦でした。二号艦の戦艦「武蔵」と並んで、日本海軍のシンボルだったことに間違いありません。後に、世界の「無用の長物の一つ」とまで言われましたが、海軍の象徴として祭り上げられていたのが戦艦「大和」でした。

その日から一二月四日迄の一〇日間、毎朝、ドックに並行して歩きました。私が戦艦大和と接したのはこの機会の一〇日間だけでしたが、毎日飽きることなく眺め、四号ドックの脇を朝に夕に行き来しました。

戦争中の東南海地震

呉海軍工廠への出張の帰途、同月七日に発生したマグニチュード7・9（推定）の東南海大地震に遭いました。

六日、広島から東海道線の夜行列車に乗車して翌七日午後五時過ぎに、新居駅に停車しましたが、列車がなかなか発車しません。暫くして隣の車両から海軍の下士官が入室して来まして、「横須賀に帰る兵はすぐに荷物を持って駅前に集合しなさい」と伝えて次の車両に行きました。私は、この列車は発車出来ないと考えて、トランクを網棚から降ろして駅前に行き、海軍士官に身分証明書を見せて、呉海軍工廠から沼津の技研に帰る途中ですと話して、今後の同行を依頼しました。海軍士官は、私の海軍省発行の身分証明書を丹念に見て同行の許可を下さいました。迎えに来たトラックに便乗しまして浜名海兵団に到着し、停電で真暗な兵舎に収容してもらい仮入団しました。そこで初めて地震があったことを知りました。三日間の休養の後、再度トラックに便乗して帰途に着きました。途中の市街地では、木造住宅の倒壊の現場を見ました。哀れな家並みでした。全て倒壊していました。当時は道路も砂利道で車も少なく、コンクリートの高層建築はありませんでした。トラックが行ける所まで乗車し、東海道線の鉄橋を歩いて渡り、沼津に帰りました。

呉で空襲に遭う

昭和二〇年に数度、呉の海軍工廠に出張しましたが、同年四月八日、戦艦「大和」は沖縄特攻に出撃し、鹿児島県の沖合で沈没し、存在していませんでした。

そして、遂に呉海軍工廠との私の最後の時が訪れました。

六月二三日昼間のB29爆撃機二〇〇機による大空襲です。その二時間余は防空壕の中で生きた心地がしませんでした。戦艦「榛名」の主砲の射撃と、それに続いてB29の爆弾の破裂音です。防空壕の中では外で何が起きているのか全くわかりませんでしたが、周囲の工場群は壊滅状態でした。

五〇メートル離れた隣の防空壕が被害に合い、一〇〇人余が生き埋めになりました。一〇分余の間隔で爆撃が行われまして、救助も何もできませんでした。空襲が終わってから助け出し、主庁舎の室内を片付けて床に寝かせて人工呼吸を行いましたが、その甲斐なく帰らぬ人となられました。実に哀れで悲惨なのが戦争です。

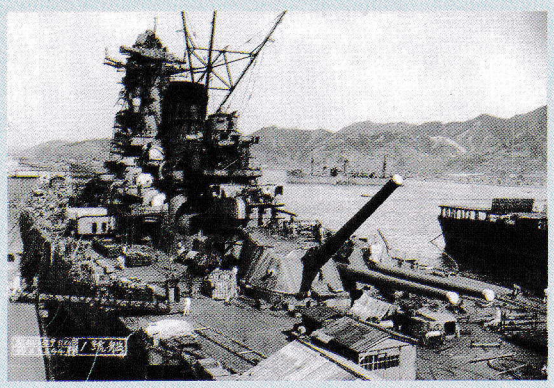
空襲の終了後、真っ先に仕事を始めたのは隣りの平屋の工場で、そこは人間魚雷「回天」を製造する工場でした。部外者は立ち入りが出来ず、人間魚雷を見る機会はありませんでしたが、その元の魚雷は大型の九三式酸素魚雷でした。無人島である上黒島の魚雷保管棚に大量にあった、巡洋艦から発射する為に製造された無気泡の魚雷でした。この魚雷を改造して人間魚雷を製造していました。反対側の隣の魚雷製造工場は壊滅しました。実に哀れな状況に追いやられてしまいました。

私は幸運にも怪我一つなく沼津に帰ることができました。情けない一日となりました。これで呉海軍工廠への出張も終了です、六月二三日が呉海軍工廠での私の最後でした。

沼津での次の実験は、B29が投下した多目的機雷の探知機の開発実験でした。七月一七日未明には、沼津市も焼夷弾空襲を受けて、技研もその被害を被りました。

八月一五日、敗戦となり、沼津の技研も音響研究部の勤務も終わりました。沼津での生活は一年九ケ月の短い期間でした。しかし私には帰る家がありませんでした。川崎市は三月一五日に空襲で焦土になっていました。人生の再出発になりました。私の戦争中の、一〇代の哀れな短い期間も青春時代の思い出になりました。

（最終時二基）
四〇口径一二・七㎝連装高角砲　六基
（最終時一二基）
二五㎜三連装機銃　八基
（最終時五二基）
一三㎜連装機銃　二基
※最終時追加
二五㎜単装機銃　六基
装甲
舷側　四一〇㎜
甲板　二〇〇～二三〇㎜
主砲防盾　六五〇㎜
艦橋　五〇〇㎜
搭載機　七機
カタパルト　二基



呉海軍工廠で艤装中の戦艦「大和」
昭和16年（1941）9月20日

平成24年度新収資料の紹介　昨年度、明治史料館に仲間入りした資料です。

寄贈	松永容子様	服部綾雄・純雄関係資料
	飯島士郎様	飯島虚心関係資料
	井上敏子様	井上元七郎ガラス板写真
	杉本泰司様	尋常小学校教科書
	田中恵一郎様	東間門田中家（東）資料
	安原照雄様	岳陽少年団安原賢三関係資料
	市原健太様	山田大夢・黒川正関係文書
	安原孝一様	小野俊一使用岳陽少年団木刀など
	仙石　規様	港橋関係資料
寄託	荒川鐵太郎様	荒川重平関係文書（追加分）

購入

沼津兵学校・旧幕臣関係（25件）

渡部温『英吉利会話篇』・塚本明毅校閲『郡名一同一覧』・中根淑校閲『小学読本万国地理小誌』上中下・浅野永好「兵庫神戸実測図複製」・「習志野原及周回邨落図」・松井甲太郎『列祖成績』巻七～十三、十六～二十・佐久間信恭編『実業英語読本』・島田三郎「連合国傷病兵罹災者慰問会謝状」、草稿「国民は日本の現状を何と見る？」、演説「禁酒は税源を拡む」、『民党政治の方針』・松井惟利編著『東京雑誌』第二号・編者愛知信元、校訂者関近義『簿記教授本』上中下・新家春三著『十二宮伝』・真野文二『教科用世界新地図』・豊島住作『商標或問』・南寮居士虚潜龍六序（鈴木龍六）『説夢録』（函館戦争人名録）・井上連吉・甲斐芳太郎「県令集覧」・塚田金蔵、上条元之助、有坂銓吉、下妻市蔵「会計便覧」・和達孚嘉撰「紀功碑拓本」・鶴田清次、佐々井半十郎撰、中島仰山画「草綿一覧」・宮崎愚編『小学読本』巻之一・石井義正編『複式啓蒙記簿法階梯』・鈴木経勲著『平壌大激戦実見録』・『キネマ旬報』第671号、第672号、第673号（映画「沼津兵学校」批評掲載）

その他沼津の歴史関係（７件）

高見沢茂著（沼津（菊間）藩士）『世界歴史の緒』・『日本キリスト教復活史』Ⅰ、Ⅱ』・『すその』第119号、第129号、第135号・「御進発御用掛」・ベアト撮影原宿帯笑園古写真・綾部関編、青木栄次郎（沼津移住旧幕臣）『小学地誌略』下・綾部関編、蜂屋定憲序『小学修身書』上・下

絵葉書（34点）

駿河名所 牛臥の遠望・静浦名勝 静浦海岸ヨリ富士ヲ望ム・陸軍士官学校遊泳演習・沼津名所 千本浜公園・沼津公園 千本浜ノ風光・駿州名勝 静浦獅子浜ヨリ布島ヲ望ム・静浦 布島の風光・西浦海岸 大瀬岬の勝景・絵葉書 山本旅館（封筒付）４点・沼津名所静浦八景・静浦の望岳・沼津公園11点・沼津千本浜三輪別荘松石園10点

平成24年度当館収蔵資料の利用　明治史料館の資料がいろいろなところで活躍しました。

☆展示使用

５月	㈶沼津市振興公社　沼津御用邸記念公園「端午の節句飾り」「祝着」
８月	㈶静岡県文化財団「輝く静岡の先人展―地震・津波・洪水―金原明善と災害から郷土を守った先人たち―」「地震之記」他
10月	沼津市常盤町自治会「文化祭」　古写真18点
	静岡県埋蔵文化財センター　秋季企画展示「土器ドキ動物ランド」（静岡市立登呂博物館情報コーナー）　元野牧捕込模型（写真）
10月～11月	板橋区立郷土資料館　特別展「高島平蘭学事始」　高島氏系図（福田重古関係資料）
	葛飾区郷土と天文の博物館　葛飾区政施行80周年記念特別展「東京低地災害史」「関東大震災全地域鳥瞰図絵」「地震之記」
10月～12月	東京都江戸東京博物館　開館20周年記念特別展「維新の洋画家　川村清雄」 川村清雄画「子どもを連れた女」（川村清衛氏寄贈）「アヒルと少年」「イカ図」（江原素六関係資料）
12月	モンミュゼ沼津「俳人清水杏芽の世界」　日枝神社芭蕉句碑拓本
１月	沼津市社会福祉協議会　企画展　古写真パネル21枚
２月～３月	八王子市郷土資料館　コーナー展「書状からみる　新時代の幕開けと千人隊」 沼津兵学校資業生合格通知、河野仲次郎より野沢房迪宛書簡（野沢房迪関係資料）
	静岡県立美術館「維新の洋画家　川村清雄」 川村清雄画「子どもを連れた女」（川村清衛氏寄贈）「アヒルと少年」「イカ図」（江原素六関係資料）
３月	代戯館まつり実行委員会「第10回　代戯館まつり」　荻生録造胸像、井口省吾陸軍大将辞令など

☆刊行物掲載

５月	学研パブリッシング『歴史群像』113号　写真「仏式伝習隊」（江原素六関係文書）
７月	国立天文台天文情報センター・アーカイブ室「アーカイブ室新聞」経緯儀写真（大川通久関係資料）
	横須賀市『新横須賀市史』別編　軍事・幕府オランダ留学生集合写真・赤松則良写真・熊谷直孝辞令
９月	新人物往来社『「朝敵」たちの幕末維新』　月岡芳年「競勢酔虎伝　伊場七郎」
10月	祥伝社　樋口雄彦著『第十六代徳川家達』『三字経』、明治７年12歳の徳川家達書（大野寛良氏寄託資料）ほか
	吉川弘文館　樋口雄彦著『箱館戦争と榎本武揚』・中島三郎助写真（旧幕臣高橋家アルバム）など15点
	平凡社　和田春樹著『領土問題をどう解決するか』「輿地航海図」（鈴木睦夫氏寄託資料）
11月	公益社団法人沼津牧水会『牧水　富士山』「沼津市全図」（大正14年９月）・「沼津市全図」（昭和31年９月）
	八王子市郷土資料館『元八王子千人頭志村貞廉日記二』　河野仲次郎より野沢房迪宛書簡（野沢房迪関係資料）
３月	富士市教育委員会『過去に学ぶ～富士の災害史』「宝永山出現之図」「田地変ジテ湖水トナル」（『地震之記』より）
	樋口雄彦「桂小五郎と砲術」（国立歴史民俗博物館『歴博』177号）　中島三郎助（旧幕臣高橋家アルバム）
	国土交通省沼津河川国道事務所　防災啓発パンフレット「小林村変地之図」（『地震之記』より）ほか
	静岡県立中央図書館『葵』47号　「小林村変地之図」（『地震之記』より）
	碧南市教育委員会『碧南市史史料第69集　訳注　大浜陣屋日記　上』「日記」（旧沼津藩士杉浦家資料）
	松村由紀「沼津に生きた明治の写真師・鈴木忠視」（『沼津史談』No.64）

☆テレビ等映像・その他

２月	静岡朝日テレビ「徹底検証！巨大地震　静岡を襲う震度７の揺れ」 「駿河の国　大地震により泥水を吹き出す図」（『安政見聞録』より）

沼津市明治史料館通信
第113号
平成25年4月25日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410－0051 沼津市西熊堂372－1
TEL055－923－3335
FAX055－925－3018
印　刷
みどり美術印刷株式会社

表紙の解説

Ｆ＝ベアト撮影「原宿帯笑園」（当館所蔵）

ベアト（1834～？）は幕末・明治初期に日本各地の風景を撮影した写真家として知られています。この写真は、オランダ公使ポルスブルック一行との富士登山の折に撮影されたもので、ベアトが残した解説シートによれば、箱根の畑宿となっていますが、他の資料によって、東海道の名園、原宿の「帯笑園」であることが判明します。ベアトの記憶違いであろうと考えられています。精緻な着色が施されています。

〈参考文献〉横浜開港資料館編『F.ベアト写真集１』明石書店　2006年

人事異動

３月31日付で事務補助員森川三千代が退職しました。

４月１日付で、文化振興課長兼館長井原正利が教育企画室に、主事大橋貴之がクリーンセンター管理課に異動、主査山本充が着任しました。

４月２日付で事務補助員中井伊久子が国民健康保険課に異動、館長内村博隆、事務補助員植松敦子が着任しました。

今後ともよろしくお願い申し上げます。